岡山大学
埋蔵文化財調査研究センター報
第 10 号

1993年11月　発行

岡山大学
埋蔵文化財調査研究センター

〒700
岡山市津島中3丁目1番1号
☎(086)251-7290

鹿田遺跡の井戸と木製短甲(古墳時代初頭)

木 器 は 語 る

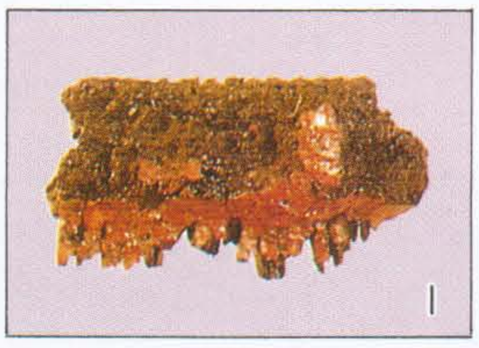
木器は、人々の生活の中で重要な役割を果たしてきた。しかし、残念ながら、遺跡から出土する遺物の中でも特に腐敗し易いものの一つであるため、現在にまで遺存するものはほんの一部である。井戸や河道といった水分を豊富に有する遺構から出土するものに限られ、まだまだその全容を描くには不十分な点が多い。そうした木器ではあるが、出土時には当時のままの姿を我々に見せ、内に秘めた様々な情報を伝えてくれる。形状は人々の生活様式あるいは風習などを考えさせ、樹種は当時の自然環境や人々の知恵を想起させる。一部の種類では、木器に残された年輪が年代決定に一役をかっている。このように、各方面から研究が進められる木器であるが、一つの難点は保存が難しいことである。長期的な保存を行うためには科学的処理が必要であり、本センターでも、長年蓄積した木器にその必要性が求められていた。昨年度、ついに、その保存計画が進み、一部で完了したのを機会に、ここで構内出土の木器に焦点をあててみたい。

(山本悦世)

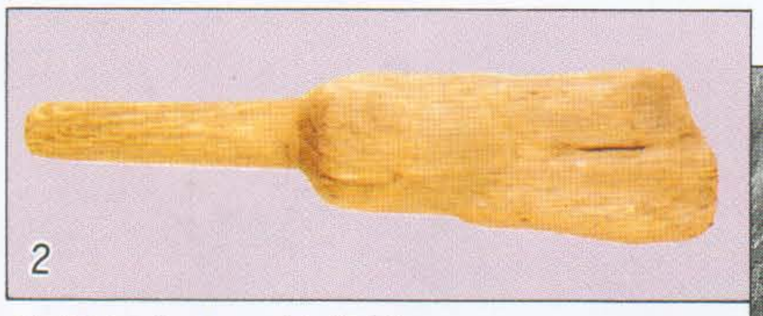
岡大キャンパス出土の木器

岡大構内には縄文～中世の遺跡群が埋もれている。幸いにして、沖積地に立地するため木器が残り易い環境にある。津島岡大・鹿田両遺跡で出土した主要木器を中心に、時代を追って概観してみよう。

<**縄文時代**>津島地区で櫛(写1)が貯蔵穴から出土している。笹で形作り、漆で固め、赤色顔料を塗布したもので、当時の色彩を鮮やかにとどめる。特に西日本での報告例は少ない。

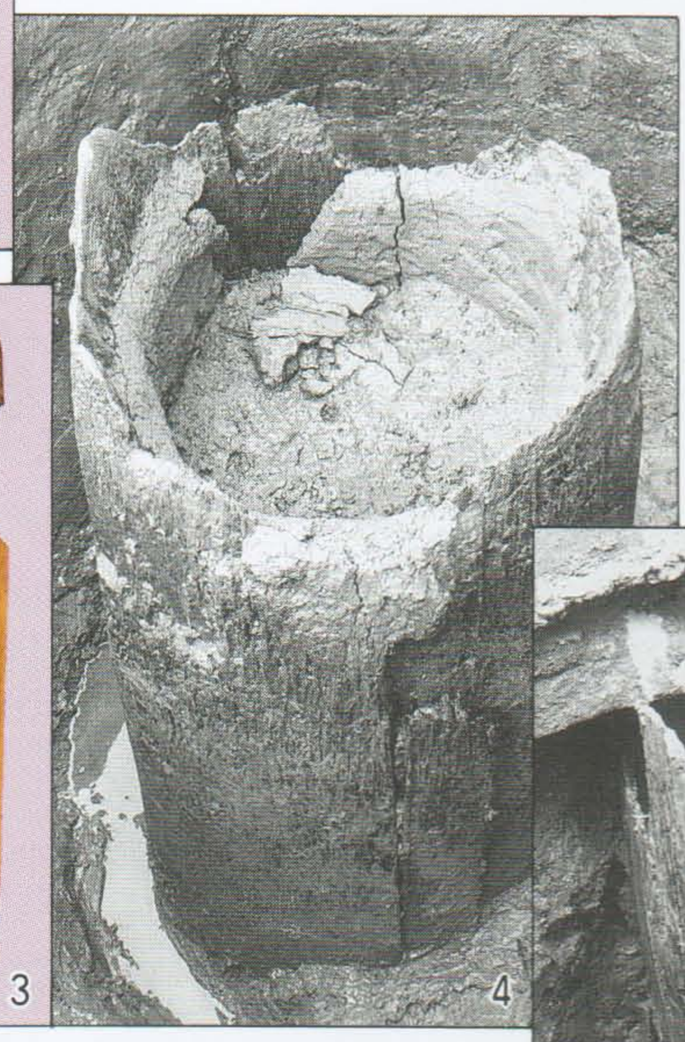

1

<**弥生時代～古墳時代初頭**>井戸からの出土が多い。鋤・砧(キヌタ)(写2)・柄・浮子(ウキ)・案(台)・田舟・櫂・短甲(表紙写)・組合部材・井戸枠等がある。農耕具、運搬具が目につくが、用途不明な物も多い。井戸枠は比較的数少ない例である。

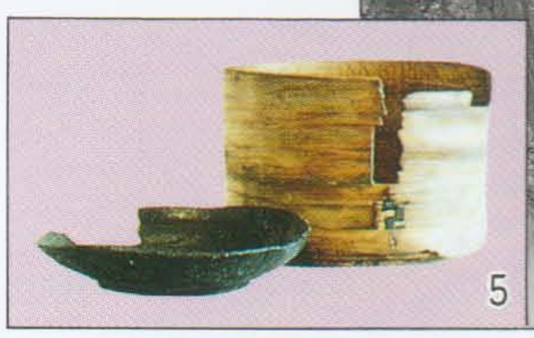

2

<**古代**>井戸・河道から出土する。井戸枠(写4)・橋・杭・櫛(写3)・刀子形(写3)・人形・曲物・木簡・斎串(写3)等がある。土木材、祭祀関係具が主体を占める。

3


4

<**古代末～中世**>鹿田遺跡の井戸からが多い。井戸材(写6)・浮子・扇子・下駄・曲物・椀(写5)・杓子・箸・すりこ木・毬等がある。日常雑器、装身具、技遊具等が多い。偶然に遺存した、限られた木器から全ては量り難い。しかし、例えば、中世には、現在に近い生活用具が出現していることや、井戸から出土する木器が、古代には弥生時代では見らなかった形代(かたしろ)や限定された種類に変わることから、祭祀形態の変化を考えることも可能である。


5

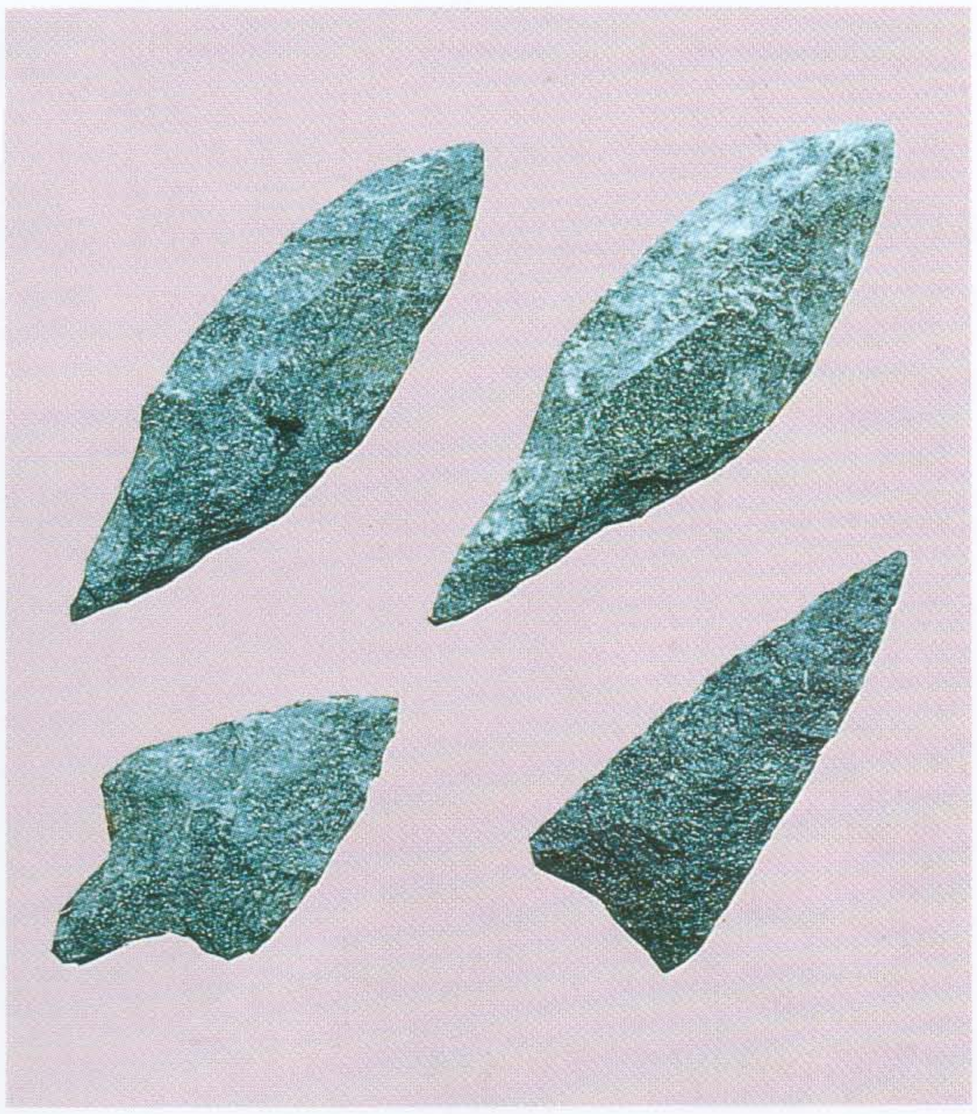
6

近年、各地の調査で、弥生時代には既に多種多様な木器が使用されていたことがわかってきた。当時の生活には、私たちが想像する以上に豊かな木の文化が生きずいていたようだ。様々な問題を秘めた木器に、より多くのことを語ってもらうため、今まで以上に働きかけて行きたいものである。

保存処理方法

木器保存で問題なのは、流出した主成分に代わって含まれる多量の水分の処理である。これを安定した物質（ポリエチレングリコール）に置き換える方法がPEG含浸法、水分除去時の表面張力をキシレンに置き換えて低下させ乾燥させる方法がアルコール・キシレン樹脂法である。この両者が一般的な方法で、遺物によって使い分けられる。処理の困難なものや精巧な製品は元興寺文化財研究所保存科学センターに処理を委託しているが、それ以外は、本センターにPEG含浸装置を設置し、保存処理を行っている。　（山本悦世）

戦いの時代と木製短甲



世界のどこかで、今日も行われている戦争。人間の歴史は、なかば戦争の歴史でもある。歴史上の戦争というと、日本では戦国時代や源平合戦などが思い出されるが、それよりもずっと前の古代や原始時代にも、戦争はあった。

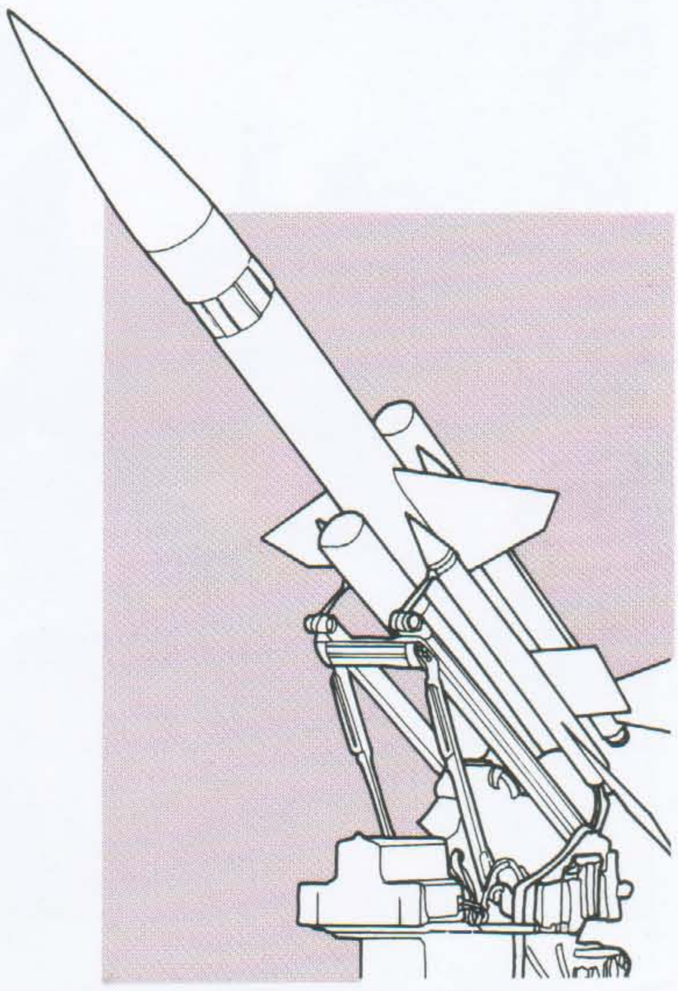
右の写真は、石で作った大きくて重いやじりだ。このタイプのやじりは弥生時代になって初めて現れるもので、動物を狩るためというより、人間を殺傷する目的で作られた武器だといわれる。ときおり、墓に葬られた人骨の中からこのやじりが出てくることが、その証拠だ。

やじりの他、剣やヤリなど、人を殺すためのさまざまな武器がどっと現れ、村々が堀や柵で守りを固めるようになるのは、じつは農耕が始まる弥生時代に入ってからのことだ。たくわえた作物を奪い合ったのだろうか。土地や水をめぐって争ったのだろうか。いずれにせよ、農耕とともに本格的な戦争行為が始まるというのは、日本だけでなく世界共通のことらしい。

戦いによって、強い村が弱い村を従え、クニを作ってゆく。勝者は敗者を支配し、しだいに身分の差ができる。生き残り、権力を握るための血みどろの戦いが、来る日も来る日も繰り広げられた。一見、牧歌的に思える弥生社会のもう一つの姿だ。

こんな日常に生まれ育つ弥生の人々が、戦闘をたたえ、武力をあがめるようになったとしても、それは仕方のないことだろう。さきに見たやじりのような実用武器のほか、儀式のために特別に作られた美麗な武器が登場してくる。教科書によく出てくる銅剣や銅鉾などがそれだ。これら「飾られた武器」は、戦いの儀式を演出する主役だったに違いないし、ときには敵の村に攻め込む隊列の先頭を飾ることもあっただろう。

鹿田キャンパス出土の木製短甲（表紙）も、細かく彫刻した上に漆を塗るなど手の込んだ作りをみせており、大量生産にかなう実用の武器とは思えない。儀式で用いられたか、あるいは戦陣の豪族が身に着けたであろう「飾られた武器」の一例だ。弥生時代より少し新しい古墳時代初めのものだが、この頃も、やがて海を渡って朝鮮半島諸国との争いを繰り返すなど、内外に戦乱のうち続く時代だったことがわかっている。



「飾られた武器」は、いうなれば好戦性の象徴であり、戦いに病んだ社会の産物だ。旧ソ連のミサイル・パレードのまがまがしい光景を思い出してほしい。鹿田遺跡の木製短甲にみる造形や技術はもちろんすばらしいが、私たちはその裏にある負の側面も忘れてはならないのだ。　（松木武彦）

最近の発掘調査から

弥生～古墳時代の村を掘る

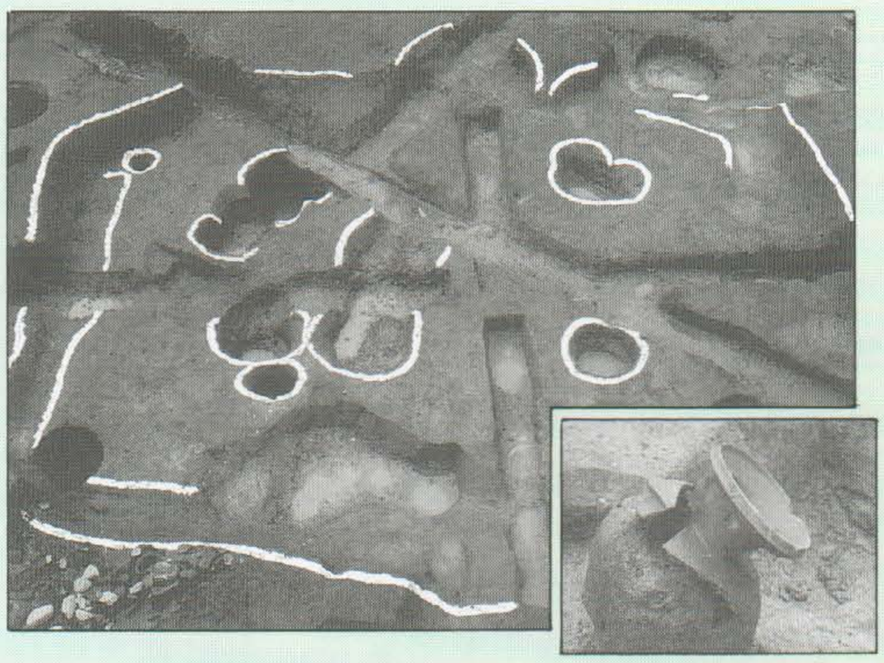
津島岡大遺跡第10次調査（保健管理センター予定地）

弥生～古墳時代の村のあとが、津島キャンパス内で発見された。この調査は、保健管理センターの新築に先立って今年の１～７月に行われたもので、津島地区では10度目の発掘調査だ。

弥生時代の村は、1900年ほど前のもの。住居そのものは見つからなかったが、水溜めや食料貯蔵などに使ったと思われる穴がたくさん見つかり、その中には、底や斜面に土器を供えておまつりを行なった跡を残すものがあった(写真下)。また、井戸(写真中)は、弥生時代から古墳時代にさしかかる頃のもので、深さ３m。くりぬいた丸太を組み合わせて井戸枠を作っていた。1700年を経た今日でも、きれいな水が湧いてくる。

古墳時代後半(約1400～1500年前)の住居２軒は、どちらも四角い形に地面を掘り、４本の柱を立てて屋根をかけたものだが、柱や屋根は残っていない(写真上)。簡単なかまどがついており、煮炊きに使ったかめや、当時の新技術で焼かれた須恵器などの土器が出土した。

弥生～古墳時代の村の発見は、津島地区で初めてであり、貴重な成果を得ることができた。(松木武彦)



住居と出土した須恵器（古墳時代後半）

井戸（弥生時代末～古墳時代初め）

弥生時代の
土壙から
出土した土器